

茨城論壇

「深作治十」夫人のふでは、小笠原流礼法にも関係していた。英雄は1857年5月に「小笠原女礼一三」を書写している。「政崎巖の塾」とあるが、英雄の回想録によると現在の栄町1丁目辺りに住んでいた川崎巖の塾である。懐剣を帯に手挟み、提灯はわざと持たずに毎夜3年間通ったとある。

『女二代の記』では、「豊田英雄さんは水戸藩の人、大日本史編修、弘道館教授として功のあった豊田天功の息子小太郎の妻でした。小太郎は藩命で長崎に留学、蘭学や工業技術を学び、烈公の信任の厚かった人ですが、開国派だということで京都で攘夷党に暗

茨城女子短期大名譽教授

小野 孝尚



山川菊栄の温かい描写

殺され、新婚間もない英雄さんは10代の若後家となつて維新を迎えました。母は藤田東湖の妹、父も水戸藩知名の士桑原力太郎で、小石川御殿のお長屋で育ち、同じお長屋に住む先生の所に通つて史

情が許さないのでやむをえず先生をしていましたよ、できないのにね」と無邪気な高笑いをしました。が、こんなふうには至つてあけっ放しの、さらっとした性格でいやみがなく、わからないこと

る。父の名前が「桑原力太郎」とあるが、正しくは、幾太郎で力太郎は長男の名前である。後年、山川菊栄は母の青山千世と共に水戸の英雄宅を訪ね聞き書きをしている。『幕

たとか、めつた斬りにされたとかいう。それを敢えてした下手人は、吉成勇太郎の部下だったとか伝えられたが、事件は責任者不明のまま葬られた。」とある。『日本人名大事典』（新撰大人名辞典・平凡社）によると小太郎は「開国進取の長計を建て、幹旋奔走中、九月二日夜、堀河通行の際同藩異論者に害せらる。」とある。吉成勇太郎信順は、

思いであつた。英雄にとつては、小太郎の妻としてあまりにも短い4年間であつたが、たくさん価値あることを学んだものと思われる。英雄にとつて最愛の夫の死は悲しみ極まるものがあつたろう。しかし英雄は、小太郎からの遺言とも言える別れの「心を鬼にしてをれ」と言う言葉を胸に、どんなに苦しい目にあつても心

記や漢書を習つたそうでした。晩年の英雄さんは私にお茶の水の昔話をして、『私も先生をやめて生徒になりました。会にそれを報告するので生徒

は正直にわからないといい、『ほかの先生にうかがつて見て』と正直にいつて、次の機会にそれを報告するので生徒に好かれたそうです。」とあ

末の水戸藩』には、「豊田天功は文久三年一月に病死したが、その息子小太郎は水戸に乏しい蘭学者、開国論者として貴重な存在だったが、市川一派の独裁と相いれず、水戸を脱して京都にのがれ、外国の学問の研究に努めていた。彼は本圀寺派の啓蒙に尽くしていたが、慶応二年、たまたま議論が熱した余り、売国奴と罵られてつるし斬りにされ

幕末の志士で水戸藩士。大変な剣客であつた。父は、吉成又右衛門信貞、母は青山延手の娘。弟は、吉成恒次郎一徳。青山千世は吉成勇太郎のめいに当たり、菊栄はめいの娘となる。英雄は、『茫々八十年の回顧』の中で、「国事の手前決してそれらの人を憎む訳はありません。」と述べている。どちらも国を思う気持ち

丁寧に描いている。山川菊栄は、同じ水戸藩ゆかりの女性の先輩として、また母千世の恩師として、同情と思いやりの心と気遣いをもつて江戸時代末期から明治時代を女子・幼児教育の先駆けとなった豊田英雄像を温かく

おの・うしよつ＝茨城女子短期大名譽教授＝1944年生まれ。水戸市在住。大正大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。茨城女子短期大前学長。20017年「茨城の近代詩人群像」、19年「幼児教育・女子教育の先達 豊田英雄とその時代」を茨城新聞社から出版。茨城の文学研究をライフワークとし、豊田英雄の教育理念の次世代への継承と顕彰活動に努めている。